

## ■ 1) 情報交換 4 点 (むさしのミニタウン)

### ▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

2003 年けやきコミュニティセンターで「地域での子育てって？」懇談会を開催。家庭や学校ばかりでなく地域社会も繋がりがあって子どもを育てることについて、また子どもが受身で参加する単発のイベントだけではなく子どもが参画できる取り組みについて模索。2005 年「ミニミュンヘン」に出会い、「これだ！」と思い動き始める。

### ▼準備から参画している子どもたち

中学 1 年生 (現中学 2 年) を核として小学 5 年生以上中学 3 年生までの子どもたちが約 30 名、子ども実行委員として参画。

### ▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

足掛け 3 年、はじめ高校生を対象に探したが、地域の中では高校生は捕まらず、中学生に目を転じると部活で忙しい、ならば小学生の時から・・・と手探りの末、今回は、2006 年の「ミニさくら」のバス研修で約 30 名の子どもが参加し、その楽しさを体験、「自分たちでもやりたい！」とやる気になり、比較的時間の余裕のある何人かがそのまま実行委員になってくれた。その後地域のお祭りの参加や WS などを提案し、学区の学校にチラシで PR をしてきた。受験やクラブ活動のため、興味はあっても参加できない子どもたちと折り合いをつけるのが難しかった。

今回中学 1 年の 5 人による役員集団(実行委員会の委員長はじめ役員は子ども、事務局をおとなが担った)としての体験、他の小学 5 年生以上の実行委員が準備と当日店長を体験したことなど、その中での成長と次回への改善の気持ちなど、参画した子どもの中では継続は当然との雰囲気になっている。

加えて報告集編集の過程でも[子どもの参画]を追及すべく、編集委員にも中高生 3 人を含め、当日を子ども特派員が取材し内容にも反映させる試みを進めている。

実行委員の子どもたちがそれぞれ担当のブースを持ち、店長として当日自分の担当ブースを運営していくやり方であったので、交代できる仲間が足りなかったことは子ども実行委員も痛感し、参画する子どもを増やすことが、彼ら自身の次回の課題となっている。

### ▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

実行委員で 1 年間活動してきた子どもたちは、「まちを知ろう・市役所のしくみ・おとなになっても住みたいまち・会場模型づくり・職業体験研修」などの WS を通し、当日をむかえたので意識が一般の子どもたちとは明らかに違っていることは自明。

一般の子どもたちに 2 日間でどのようにまちづくりに関わってもらえるのかは、まずは事前のしっかりした体制づくりで、今回初めてであまりにも整っていないことが多かった。にもかかわらず参加した子どものなかには、次回はこのようにしたいと具体的な提案を持っている子もいたことから、とにかく継続し開催することが何より大切と痛感した。